

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
かたぎり みね こ 片桐 峰子	女 性	20代	設楽町名倉

## 「終戦の日 ～ 自決の決断」

「東三河郷開拓団からの手紙」より

(部分修正)

昭和20年8月15日、本部より伝令が来て全員本部へ集合するよにとのことで、急いで皆で本部へ行きました。団長さんの話では、当開拓団へあと3日で、ソ連の戦車隊が攻めてくるというのです。この東三河郷開拓団は、三方ソ連国境に囲まれていて、国境のない空いている所からソ連軍が来るから、とうてい逃げられないとのことです。それで、日本人らしくいさぎよく全員自決しようという話が決まったのです。自決の方法は、拳銃が6丁あるから6人は残っていて、子どもたちを一つの教室に入れます。子どもたちの苦しむ姿を見るのは辛いから別れて、次の教室へ大人全員が入り、手榴弾を投げ込みます。全員の死を確かめてから、後に残った6人はお互いに拳銃で撃ち合って自決しよう、と話合って決めたのです。みんな部落まで重い足を引きずって帰りました。団長さんは、

「明日で終わる命、今夜はおいしい物を食べて、最後だから美しくして。」

と言われました。自殺の決心をして家へ帰ってきたものの、この遠い満州までわざわざ来て、仕事も事業もやっと軌道に乗ってきたのに、明日で終わりかと思うと、父母兄妹の顔を見ると泣けて泣けてたまりませんでした。いろいろ作った食事も胸がいっぱいで、まるで砂をかむようで味がありませんでした。

翌朝、決められた時間に皆そろって本部へ向かいました。8キロあまりの道のりの中程まで行った時、本部から馬を走らせて伝令がやって来ました。何かかと思立ち止まっていると、そばまで来て、「日本が負けた。大至急本部へ集合。」とのことです。あ然として半信半疑で本部へ行き、全員集まったところで、団長さんが真っ青な顔を引きつらせて言いました。

「ラジオで日本が無条件降伏した。天皇陛下の放送があり、『外地にいる日本人たち、これからは憂きことに耐え、早まったことをしないで、辛くても一生懸命に命を長らえて、内地日本国へ帰ってきて下さい。』との放送を聞いたから、自決の決行は取りやめにする。」

皆わっと、声を上げて泣きました。男の人も声を上げて座り込んで泣いていました。それからの日は、毎日が生き地獄の生活で、満人が手の平を返すように、匪賊の襲撃が始まりました。まだまだたくさんお話ししたいことばかりですが、またお知らせします。もう戦争はこりごりです。

平成2年11月 (記録者 森谷紗千子さん)